

多彩な資料、新しい発見

—図書センターの特集展示—

図書センターが「特集展示」を始めて、2009年6月で1年になりました。
毎月いろいろな切り口のテーマで所蔵資料の中から関連する図書や視聴覚資料を集めて、
特集のコーナーに展示しています。

図書センターは、日韓関係・韓国・朝鮮半島に関する専門図書館です。関連の図書（和書・韓国書・洋書）・逐次刊行物・視聴覚資料など約2万7千点をそろえ、閲覧・貸出・レファレンスサービスを行っています。「特集展示」の企画は、こうした豊富な所蔵資料を紹介することを目的に、2008年7月から始めました。

2009年5月「韓国文化の源流を探して」では、特に伝統音楽に関する図書やビデオが好評を得ました。イベント用品として貸し出している「チャンゴ（伝統的打楽器）」などを合わせて展示したところ、「チャンゴを所蔵しているとは知らなかった」といった声が寄せられました。また、2009年6月「韓国語に親しむ」で、中・上級学習者向けの学習教材や文学作品なども紹介したところ、「いろいろな教材があることが分かって、ためになった。面白い」といった感想をいただきました。特集展示が、所蔵資料の多彩さを知っていただく機会になったのではないかと思います。

テーマと関連する資料を探す段階で、スタッフの間でも毎回

のように新しい発見があります。この小さな発見を、利用者の方にも味わっていただけるようにと、いつも心掛けています。特集展示のコーナーでは、図書の表紙の魅力が伝わるように並べます。いつもは書架に収まっていた題名しか目に触れませんが、展示された図書を見て、「つい、借りたくなってしまった」と言う方もいます。感想を下さる方もいて、スタッフに気



入り口近くのブックカートが特集展示のコーナー



魅力ある図書のデザインが興味をかきたてます

軽に質問していただくきっかけにつながったように思います。

また、以前は来館されるとまず新着図書コーナーをチェックする方が多かったようですが、特集展示のコーナーも見てから書架の奥まで入っていく方が増えたように感じています。

特集展示が図書センターを訪れる楽しみの一つとなるよう、今後もさまざまな企画を考えていきたいと思っています。

これまでの特集展示一覧

- 2008.7 韓国の絵本・昔話
- 2008.8 黄真伊（ファン・ジニ）と春香（チュニャン）
- 2008.9 韓国の伝統芸能・パンソリ
- 2008.10 読書の秋
- 2008.11 秋は新書から
- 2008.12 韓国への旅
- 2009.1 絵でみる韓国、写真で知る韓国
- 2009.2 ソウル
- 2009.3 詩の世界
- 2009.4 韓国の古典
- 2009.5 韓国文化の源流を探して
- 2009.6 韓国語に親しむ

日韓文化交流基金懇談会 講演「フィールドワークで見た日本・韓国・沖縄」(要約)



5月11日に日韓文化交流基金懇談会を開催し、伊藤亜人先生の講演「フィールドワークで見た日本・韓国・沖縄」を行いました。

文化人類学とは何か

私は東京大学での定年後、3年間琉球大学に赴任し、2009年4月から早稲田大学アジア研究機構におります。現在進めているプロジェクトは、北朝鮮における人々の生活の問題です。北朝鮮というと、拉致や、核、ミサイルなどの問題ばかりが目立っていますが、そこに生活している人の現実、さまざまな面で周りの東アジアの社会と格差が開いています。それを長期的な日本の政策の中に東アジア地域の問題として位置づけていくことが必要だと考えています。

私は韓国研究を、文化人類学の観点から人間の問題の地域的なケースとして扱っています。同時に、日本との対比や韓国研究を通して見た沖縄を位置づけようと努めてきました。

文化人類学という分野では、人間社会の総体的研究ということを強調しています。多くの学問分野は専門化の中で体系を成り立たせた結果、人間の生活を構成する諸側面の相互関係の全体像は見失われがちです。実際に私自身が韓国のフィールドで研究してきた姿というのは、専門家が専門分野だけやれば済まされるようなものとはかけ離れたものでした。リアルでトータル

な生活者の姿を描くために、なんにでも関心を持つべきだというのが人類学の姿勢といえます。

1970年代初めの韓国でのフィールドワーク

私は1971年に初めて韓国に渡って簡単な調査を済州島で行い、1972年から珍島という地域社会で本格的な自分の調査を始めました。その珍島のフィールドだけは今日まで続けており、30数年の間、基礎的なことから始めて、現代的な問題や応用的な問題に徐々に対象を広げてきました。1970年代初めは、日本で韓国研究を手掛けるけようとする人はそう多くはなく、人類学・民族学でも韓国研究を避けていたといえるかもしれません。当時の朴正熙軍事政権の韓国から距離を置こうとする日本のインテリ、マスコミは多かったのが現実です。

私がフィールドワークを始めたとき、韓国の地方社会の人々は、戦後初めて見る日本の若者に大変関心を持ち、いろんな視線にさらされました。とはいえ、つらいなどと思うこともなく、日常生活は新鮮で、文化人類学的な意味で非常に知的な刺激にも満ちていました。当時の韓国のムラの社会は、徒歩で行ける定期市場ぐらゐまでが生活圏で、よほどのことがない限り町には出ませんでした。そのため、ムラの中に生活全体があり、経済、宗教、社会、政治などが、渾然一体となった状態で存在していました。

1972年10月に「シウォルユシン（10月維新）」の事態が起こり、朴正熙大統領が突然戒厳令を出し、国会が閉鎖されました。当時、ムラにはトランジスタラジオのある家庭がずいぶんありましたが、みんな忙し

くて気が付かず、私が日本のラジオのニュースで韓国のことを伝えているのに初めて気付きました。そこで、戒厳令のことをムラの人たちに話したのですが、皆何のことがぴんとこない、というのが現実でした。

ムラでは、協力者でもあり長い友人にもなる朴柱彦氏と出会いました。彼はこちらの趣旨や研究の展望や理念というものを完ぺきに理解し、彼を通していろいろな調査が可能になったといえます。また、私にとってムラは新鮮で不思議な世界だったのと同様に、ムラにとっての私も、異分子であると同時に刺激の材料であり、私を通していろんなことを学ぼうとし、いじめながら一方では守ってくれるという不思議な関係でした。最近研究対象として「交流」を取り上げるようになって、こうしたわれわれの研究も交流の一環なのではないかと気が付きました。私自身も、誰よりも先に韓国との交流をやってきたと思っています。

韓国のユニークさー父系血縁原理、儒教社会の伝統、人の移動

韓国というフィールドは、人類学的にかなりユニークな面が幾つかあります。例えば、現代の経済発展、都市化、資本主義化にもかかわらず、父系血縁の原理を放棄・否定せず、氏族の祖先を敬い、一族の関係を大事にするという社会は、先進国の中では韓国しかありません。同様のことは、儒教社会の伝統についてもいえます。社会規範における儒学の強調、地方の書堂から中央の成均館に至る教化機関のハイアラキー、儒者組織の存在など、韓国社会が東アジアの中でも儒教の伝統をいまだに強く維持していることは特筆すべきものといえます。

また、「コリアン・ディアスポラ」という言葉があります。「ディアスポラ」とは、そもそも受動的・強制的な移住、人の移動を指すものですが、現在の韓国では経済発展の進展や政治の抑圧がなくなったにもかかわらず、一層の教育やビジネスの機会を求



多くの参加者が集まり、日本と韓国との文化的な差異などに耳を傾けた



1970年代の韓国のムラ。中央で酒を注がれているのが伊藤先生 写真提供:伊藤亞人

めて、人々がますます世界中に広がっていくという、移民研究の中でも特異な現象があります。その背景には韓国の民族社会の高い均質性や一極集中があり、そこから生じる新たな差別や対立、競争を避けるために国を離れているということが、ほぼ明らかにしつつあります。

論理体系性の韓国、モノ・様式・由緒の日本

韓国と日本を対比してみたときに、韓国は論理体系性を重視するのに対して、日本は論理体系性よりも、モノ、「型」などと呼ばれる様式、由緒や慣例といった体系化されていないものを重視し、社会を構成しているといえます。韓国人々は抽象的な観念的な言葉が優越し、論理的な思考をする一方で、実践や経験といったことはややおろそかにされます。学校でも子どもたちの指導性をはぐくむことを重視します。しかし日本では、豊富な経験を基にさまざまな状況に対応する「世話役」や「裏方」であることをよしとし、指導性の強調は希薄であるという違いがあります。韓国人々にとっては、そのような日本の姿を理解するのはなかなか難しいようです。

私の韓国でのフィールド経験を通して見てきた日本像とは、言語と論理を駆使し

て人を説得する指導者が君臨した東アジア文明の中では周縁部にあり、経験と勘といった、多元的で柔軟な思考、蓄積の社会だということです。「文明」とは、個別の経験を超越した普遍的・論理的な体系にリアリティーをおき、それを駆使するエリートが社会を統合してきたもので、文明の周辺部は論理性の欠如のために疎外されるというのが一般的です。日本は東アジアの中で本来ならば疎外される立場になるにもかかわらず、地理的・生態学的な条件の下で、世界の中でもまれなる民俗知識の社会を築いてきたといえますが、論理性を重視する外国の人にとって、このような日本のあり方は分かりにくいように思われます。

「沖縄モデル」—愛郷心、郷土への思いの強さ

沖縄は日本によって併合・編入された王国社会です。琉球大学にいて実感したのは、ほかの地方国立大学が藩政時代からの地域に根差した知の伝統や人材養成の体制を何らかの形で引き継いでいるのに対し、琉球王国はそれを維持できないまま日本に併合・編入されてしまったために、教育・研究体制のインフラに当たる地域との連携が不十分だということです。

しかし別の面では、滅亡した宮廷文化を

民間がこれほど継承しながら発展させている社会は、世界的にもまれだと思います。ここで言う宮廷文化とは、琉球の古典音楽です。もともと士族の素養として古典音楽の体系があり、現在民謡で使われる三線はもともと士族の音楽で使われていました。今、沖縄の140万の人口に対して40万丁の三線があり、それだけ多くの人たちが古典音楽を継承しています。非西洋世界で、沖縄以外に民間が宮廷音楽の伝統を維持・伝承しているケースは多くありません。

それから、強い愛郷心と、故郷に帰りたいという気持ちの強さです。この点で、沖縄と韓国は対照的です。韓国は、ふるさとや土地に対するこだわりが低く、いうなれば場所にとらわれない「サイバー人間」的な社会です。それに対して沖縄は、島から離れたら「ウチナンチュ」は成り立ちません。今日、沖縄ほど土地に誇りを持ち、非常にポジティブにとらえている社会は世界でも珍しいかもしれません。沖縄というのは島の社会で、その中に凝縮された人間関係と知識と歴史があります。沖縄の人にとって、ふるさとの伝説と、生活の装置であるいろんなもの、場所、それから友達ちというものが、きわめて重要です。

そこに至るまでは、大変な犠牲も払い、今も経済的には外部に依存して成り立っています。しかし、生活のクオリティーという点では、「沖縄モデル」といえるほど、非常に特殊な目標を達成しているといえるかと思います。そういう点で、沖縄社会もまた東アジアの中で非常にユニークな存在であり、ひとつの究極の生活スタイル、あるいは理想の地域社会を達成しているといえるかもしれません。



1970年代の韓国のムラ 写真提供:伊藤亞人

整ってきたバックアップ

2005年からスタートした私の韓国語落語・韓国公演。通算で6回目となる今回は、5月23日(土)から27日(水)まで、春川、南怡(ナミ)島(ソム)、釜山、済州を回り、合計5公演行った。そして、今年も多くの方々のご協力のおかげで大いに楽しんでいただいた。

公演の回を重ねるごとに、バックアップの態勢がどんどん整っていていることを肌で感じ、感謝の気持ちでいっぱいになる。素晴らしい会場を提供してくださった韓国の学校や博物館はもちろんのこと、金屏風をはじめ、舞台用具一式をそろえてくださった上に、移動にまで力を注いでくれた日本の大使館、総領事館。そして、初期のころから公演のコーディネートなどをしてくださった国際交流基金ソウル日本文化センター。ほかにも数え上げればきりがないほどである。

日本の文化である落語を韓国人が聴いて楽しむ。そのために、日韓双方の組織・団体が協力して物事を推し進める。まさにこれが文化的、そして人的交流であり非常に意義深いことだと感じる。

韓国の若い観客たち

23日(土)朝、ソウルを車で出発し春川へ。ドラマ『冬のソナタ』の舞台として知られる春川であるが、訪れるのは今回が初めて。少しでも観光をしたかったのだが、渋滞に巻き込まれ到着するやすぐに公演



ワークショップ(釜慶大学校)

の準備。会場は国立春川博物館。立派なホールに300人近いお客様が来られ、補助椅子を出すほどの大盛況。韓国語で『時うどん』と『犬の目』を演じた。客席には、親に連れられて来た幼稚園か小学校低学年らしき子どもの姿が目立った。日本ではしばしば、子どもたちが声を上げたり立ち歩いたりして公演の妨げになることが多い。ところがそんなことは一切なく、最後まで集中して、大人と同じように楽しんでいった。韓国では躰がしっかりしていて、行儀の悪い子どもがいたら他人でもきちんと注意をするとのこと。これは日本もぜひ見習ってほしいものである。

25日(月)は釜山の釜慶大学校で、26日(火)は済州へ移動し済州大学校で公演。どちらも日本語を学ぶ学生が多い。韓国語で一席演じた後、日本語で別の噺を披露した。毎回、韓国の若い世代の日本語力には驚かされる。日本語の細かい言い回しや表現が十分に伝わって、客席から「笑い」という形で反応が返ってくるからである。

済州大学校の日本語科の先生(もちろんネイティブの韓国人)が私にこう言った。

「やはり、落語は日本語で聴くのがいいですね」。韓国語で演じることによって韓国人に落語を紹介しようとしている私としては少し複雑な気持ちになったが、落語の「日本語だからこそ出せる味わいや面白み」を韓国人に感じてもらえるというのは、噺家として素直にうれしかった。

27日(水)は済州外国語高

校で行った。高校での公演は初めてだったので少々不安であったが、始めてみると好奇心旺盛な若者のパワーに私も乗せられ、楽しく演じることができた。最後は数人の生徒を舞台に上げ、ミニ落語教室。私の羽織を着てもらい扇子を箸にしてうどんを食べる仕草をしたり、短い小噺をその場で覚えて披露してもらう。みんなの笑顔を見ていると「来て良かった」と心底思える。

同じ言葉で笑えることの素晴らしい

日本と韓国には過去に暗い歴史があり、今でも政治的にギクシャクすることが多い。「反日」や「嫌韓」という言葉を耳にすることも度々だ。しかし、それとは全く正反対の意識や考えを持っている人々が両国に多数存在していることも事実である。私は韓国で公演をする度にそれを痛感する。日本のことが大好きな韓国人、日本語を話したくて一生懸命に勉強している韓国人。そして日本には、韓国語を学ぶ日本人がたくさんいる。

同じ言葉で笑えるというのは、実に素晴らしいことだ。韓国人が、韓国語、そして日本語の落語を聴いて大爆笑する。それは、落語のおかげで生きている、そして、韓国にルーツがある私にとって、この上ない喜びである。そのためには、語学においても落語においても、さらに精進しなければならない。

PROFILE

笑福亭銀瓶
しょうふくていぎんべい



1988年笑福亭鶴瓶に入門。2004年から独学で韓国語の勉強を始め、習い始めて3カ月で韓国語落語にチャレンジし、2005年から韓国でも公演を行っている。2008年には中堅・若手の落語家を対象とした「第3回繁昌亭大賞奨励賞」を受賞。



春川での公演

「音の力」「詩の力」を信じて

この企画は、2007年のNHKドキュメンタリー番組「海鳴りのなかを～詩人金時鐘の60年～」で、ピアニストの原田依幸と在日のカヤグム奏者の張理香が音楽を担当したのをきっかけに、金時鐘が自身の詩の中で表現し語りかけている内容―済州4.3事件を含む―を今に伝えることができるのは「音の力」「詩の力」にこそあると信じ、詩と音楽の表現による構成で始めたものである。2008年7月25日・26日の東京公演で大きな反響があり、今度は金時鐘の本拠地である大阪で行うことに意義を感じ、昨年から企画して今回の大阪公演実現となった。

京都公演・法然院

本公演に先立ち、京都の法然院で韓国チーム（金茂吉・玄琴、李鉄柱・テグム、張理香・カヤグム、金龍河・ヘグム、李榮勲・長鼓）による韓国伝統音楽と舞踊公演が行われた。法然院の本堂隣の特別公開の部屋には文化遺産のふすまがあり、その部屋が舞台となった。公演は白いチョゴリを着た趙寿玉の静かな舞と、金茂吉の玄琴によるプロローグで、厳かに始まった。そして金龍河の長鼓伴奏による張理香のカヤグム散調の演奏は、深く重く法然院に響き渡った。金時鐘の想いの深い韓国の歌が、南道民謡の「六字ペギ」（注1）、京畿民謡「ノレカラク」と聞いていた韓国チームは、京畿民謡メドレーの中で「ノレカラク」を演奏した。また、「海鳴りのなかを～詩人金時鐘



韓国伝統音楽と舞踊(法然院)

の60年～」でのカヤグムソロ演奏「六字ペギ」が、本公演の一つの深いテーマであると信じた張理香を中心に、金茂吉と若手隋一のヘグム奏者金龍河、李榮勲（ピリ・長鼓）によって最後の演目「六字ペギ」は法然院の中で厳かに熱い音で締めくくられた。

京都公演は大阪公演を示唆する重みのある内容で終始していた。玄琴の大家であ

り準人間文化財の金茂吉とテグムの最高峰である李鉄柱を韓国から招請できたことが、本公演の韓国チームの音にさらに重みと深みを加えた。当初予定をはるかに超える約170人の観客を集め、観客の感動は演者が出口であいさつをして観客を見送ったときに実感できた。

大阪公演・大阪中央公会堂で 伝えたもの

大阪公演は、京畿民謡の「チョンソニアリラン～キンアリラン～クンガンサンタリョン～ノレカラク」演奏で始まり、金時鐘の詩につないだ。金時鐘は光州事件の詩と済州4.3事件の詩を、時には話を交えながら次々と朗読した。その朗読は、人々の心に染み入る言葉の力があり、聞いている者は自然と涙した。舞台袖で待機している楽師たちにもその言葉の感動が伝わってきた。

パンソリの安聖民は沈清伝を歌い、原田依幸はピアノソロを激しく弾いた。そして、韓国チームの生音で趙寿玉がサルブリ舞（注2）を舞った。

詩「囁む言葉」（光州事件の時に投獄され断食し死んでいった朴寛鉉に捧げた詩）の朗読では、金茂吉と李鉄柱の即興演奏が詩にいつそう重みと悲しみを添えた。

そして、金時鐘に捧げた韓国チームの最後の演目「六字ペギ」は、京都公演同様、熱く重く深く演奏された。ラストは、金時鐘が自身の済州島の父への想いとその父と



詩を朗読する金時鐘

の思い出の曲「クレメンタインの歌」（著書『「在日」のはざまで』にも記されている）などを語った。その語りとともに、原田依幸のピアノが金時鐘の言葉・呼吸に寄り添うように奏でられ、さらに涙と感動を誘い公演の終わりとなった。

大阪公演は、インフルエンザ騒ぎの真ただ中だったため、集客数が当初予定には達しなかったが、大阪中央公会堂の美しい舞台と客席にすべての演目がリンクして、意味のある深い内容であった。金時鐘の詩と言葉、韓国伝統音楽、舞踊、ピアノの即興演奏は、その場にいた観客に着実に大切な多くのものを伝えた。

（注1）韓国の全羅道地方の代表的な民謡で雑歌という種類に属し、ユッチャ（六字）は南無阿弥陀仏を意味する。この歌の中に「救い」を求める意味合いが込められている（金時鐘談）。

（注2）「サル」は持って生まれた悪い運勢、「ブリ」は「振りほどく」という意味であり、「サルブリ」とは「厄払い」ということになる。また、全羅道地方の巫儀に用いられた音楽の名称でもある。

PROFILE

神谷 一義
かみや かずよし

レコード会社メディアルネッサンス、オフノートレーベルの代表。大工哲弘や原田依幸ら日本を代表する音楽家たちのCD制作をはじめ、多くの音楽公演を企画制作している。

朝鮮時代に設置された司訳院は、外交の任に当たる官人を育成する国の外国語教育機関であり、日本語教育は、その下の倭学庁(1415年設立)で始まった。倭学庁の日本語学習書は、当初『伊路波』など14種類が規定されたが、1676年に『捷解新語』という実用的な学習書が編纂され、その後数度の改修を経て、司訳院が廃止される1894年まで使われた。このほかにも辞書類の『倭語類解』がある。

これらの学習書の日本語にはハングルで音注(日本語の読み)が記されている。特に、『捷解新語』は当時の口語で書かれ、また、日本語の変化によって改版が行われるなど、史的研究の資料として重要視されている。

朝鮮資料の音注表記

日本語に記されているハングル音注には、一貫して一対一で対応しているものと、同じ教科書の同じ音節でも多様な文字が使われているものがある。前者は、母音の「あ、い、う、お」、サ行の「さ、し」、ナ行の「な、に、ぬ、ね」、マ行の「ま、み、む、め、も」、ヤ行の「や、ゆ、よ」、ラ行の「ら、り、る、れ、ろ」、そして「わ」のような音節で、日本語と韓国語の両方にほぼ発音の変化がなかったということになり、これらの発音は、日本語でも韓国語でも非常に安定している。

反面、後者は清音の子音部(か:ka, kka)、濁音の子音部(が:ka, ŋ-ka, ŋka)、ハ行の子音部(は:fa, ha, hoa, pp'a)など、多様な音注で記され、そこには、当時の日本語の音声記述されている。『伊路波』の例を二、三挙げてみる。まず、「ち・つ」には「디(ti), 두(tu)」が記されている。現代語のように破擦音

/ci/, /cu/であれば、「지(ci), 즈(cu)」が予想されるが、子音部の音注が[t]ということは、まだ破擦化は起こっていなかったこと、すなわち、当時は「ち」が[ti]、「つ」が[tu]のような発音であったことが分かる。ハ行子音部には、「ㅎ(h), ㅅ(f), ㅆ(f')」を当てている。現代語から考えると「ㅎ(h)」が予想されるが、「ㅅ(f), ㅆ(f')」が記されているということは、当時、日本語のハ行子音部の発音には、両唇摩擦音[ɸ]が残っていたことになる。

また、濁音節には「ほど 혼도(hon-to)」「はば 함바(ham-pa)」のように鼻音n・mを前の音節の末尾に付けて記している。これは濁音節の前にすべて鼻音性が入っていたことを示す。「ほど」の場合、現代語は[hodo]と発音するが、当時は[hondo](ほんど)のように発音したことが分かる。

このような発音は、『捷解新語』になると「ち・つ」は「지(ci), 주(cu)」、ハ行子音部は「ㅎ(h)」、濁音は「ほど 호도(ho-to)」「はば 하바(ha-pa)」と記され、現代語に近い発音に変わっている。

多様な音注は音声の記述

『伊路波』には「イロハ歌」とその他の語に異なる音注が使われている。

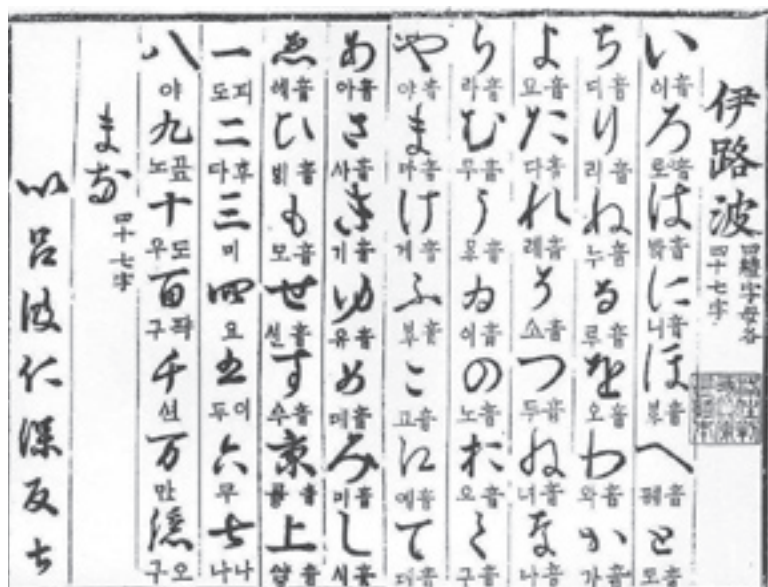
	い	ゐ	う	を	は	ひ	ふ	ほ	す
イロハ歌	ŋi	ŋi	wu	ŋo	fa	fi	fu	fu	n-zu
その他	i	無	u	無	ha	pi	hu	ho	su

ここから、「イロハ歌」を最初に読み始めるときは「い」の前に

鼻音が入ること、「ろ」と「は」行は唇音性が強く、「い、え、お」と「ゐ、ゑ、を」とが区別されていること、さらに、「イロハ歌」のハ行子音ははまだ両唇摩擦音[ɸ]が残っていること、などが明らかになる。

『捷解新語』にも同じ音節に多様な表記が現れる。〈巻三a,b〉の「下船して宴会での問答の場面」を例として挙げてみる(図2)。

まず、「御めにかかり」の「御」の音注がon(原刊本)からo(改修本)に改修されているように、文型や語彙の改修がない場合も、音注は正確に改修を施したことが分かる。原刊本から改修本への音注の改修は、日本語の音声の変化によるもの(まで:man-tyei<原>→ma-tyei<改>など)、日本語表記の改善(御さた:ŋko-za-tta<原>→御さった:ŋko-zat-tta<改>など)、誤謬と思われるところの訂正(ちくぜん<筑前>:ci-ku-syən<原>→ci-ku-zyəin<改>)によるもので



〈図1〉『伊路波』の音注表記

toŋ nyəŋ ki kka ra o si ra ru oa o to ka i pi sa si kyəi
とねきからおしらるわ、御とかいひさしけ
ryəin to mo taŋ ka i ni on myəi ni ka ka ri ma ru syəi in
れとも、たかいに御めにかかりまるせいん
tyei no ko ri o o ŋko za tta ni ko u mi ma ru si tteyi myəin
て、のこりおお御さに、こうみまるしてめ
cu ra si ŋko za ru
つらし御さる。

〈原刊本、巻31a,b〉

to u ra i yo ri o o syəi ra ryəi ma ssw ru oa o to ka
とうらいよりおおせられまするわ○御とか
i na sa ryəi ma si tteyi hi sa si u na ri ma ssw ryəi to mo
いなされましてひさしうなりますれとも○
taŋ ka i ni o myəi ni ka ka ri ma syəi i tyei no ko ri o
たかいに御めにかかりませいて○のこりお
o ŋko zat tta ni ka yo u ni o myəi ni ka ka ri ma
お御さつたに○かやうに御めにかかりま
si tteyi myəi cu ra si u zon zi ma ssw ru
してめつらしうそんしまする

〈改修本、巻31a,b〉

to u ra i sa ma yo ri o o syəi ra ryəi ma ssw ru oa o
とうらいさまよりおおせられまするわ○御
to ka i na sa ryəi ma si tteyi hi sa si u na ri ma ssw ryəi to mo
とかいなされましてひさしうなりますれとも
taŋ ka i ni o myəi ni ka ka ri ma syəi i tyei o na
○たかいに御めにかかりませいて○御な
cu kka si u ŋko zat tta ni ka yo u ni o myəi ni ka
つかしう御さつたに○かやうに御めにか
ka ri ma si tteyi ta ko u ni zon zi ma ssw ru
かりましてたかうにそんしまする

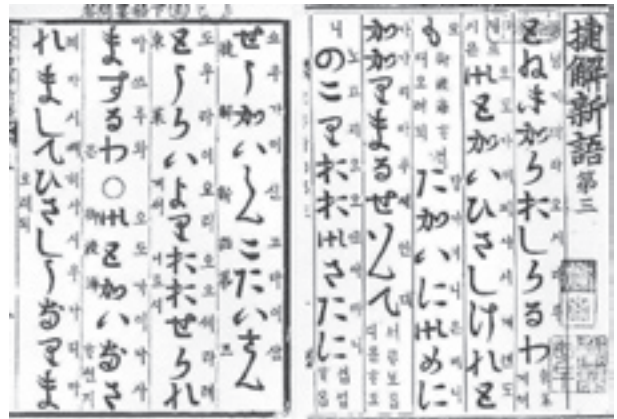
〈重刊本、巻31a,b〉

〈図2〉『捷解新語』音注表記の比較

ある。一方、改修本から重刊本への音注の改修は、音声の変化による改修はあまり見えない。それに対して、音注表記法の方針の変化によるものは非常に多い(御さつた: ŋko-zat-tta〈改〉→御さつた: ŋko-zat-ta〈重〉、ながら: nan-ka-ra〈原〉→na-ŋka-ra〈改〉など)。

また、清音の「か」「す」「た」「て」「と」音節などに、濃音と平音を用いて表している音注がある。「か」音節は〈原31a〉の場合、「から(助詞)」の「か」(音注kka)と「とかい(渡海)」の「か」(音注ka)は音韻的に同じだが、音声的には「から(助詞)」の「か」は緊張音であり、「とかい」の「か」は弛緩音である。二様が現れる原刊本の「つかしられた(ta)」の「た」と「まいた(tta)」の「た」も、前者は弛緩音であるのに対し、後者は緊張音であることで音声的に対立している。

濁音節は原刊本の「まで(助詞)」の「ししゃ(使者)」が「ながら」はman-tyəi, si-syən-ka, nan-ka-raのように、濁音節の前に鼻音が挿入されているものと、「ご(御)」のŋkoのように語頭の濁音節の場合は子音部の前方に鼻音を付けているものがある。また、語頭、語中共に「げにん(下人)」の「むづかしい」のkyəiとcuのように平音のみで記しているものも多く見られる。すなわち、濁



〈図3〉『捷解新語』の音注表記

音節にこのように非規範的に、しかも同じ音節にも二様の音注が現れるのは、濁音表記ではなく鼻音を表しているからである。この鼻音表記は改修によってなくなる傾向がある(まで: man-tyəi(原刊本)→ma-tyəi(改修・重刊本))。

主観的な音韻体系と 弁別可能な音声要素

音注表記には有声音と無声音の区別はない。これは韓国語の音韻体系と関係があり、清音の場合は平音と濃音表記を用いて、音声的に弁別が可能なtense(緊張音)性の有無についてのみ示しているからである。また、濁音の場合も、音韻体系上の区別が可能な鼻音性の有無のみが記されている。

kkaとkaを用いて区別しようとしたのは、韓国語の音素の範囲で日本語の音声の違いを感じたからであり、韓国語の音韻体系ではこれが日本語の発音教育上重要であると思ったからだろう。「か」に対してkkaとkaを用いている以上、両者は音声的に別の音であると認識するのである。その結果、清音と濁音が音注で区別されているようにも見えるが、むしろ音声的な違い(清音=tense性、濁音=鼻音性)が日本語の音節の音注表記に記されていると見る方が妥当である。音注表記のほとんどを占めている非tense性と非鼻音性の音注は平音で記されていることから、音注上では区別がつかない。この場合の音声実現は韓国語の音韻体系によって読まれたと思われる。

PROFILE

趙 垺 熙
チョカンヒ



岡山大学大学院修士、広島大学大学院博士。2008年9月～2009年7月、東京外国語大学で訪日フェローとして研究。専門は日本語学(音声・音韻)。

「明日 将向金馬郡 求所謂支石者觀之 支石者 俗傳古聖人所支 果有奇迹之異常者」。これは高麗時代の文人、李圭報が記した『南行月日記』に見られる一文である。高麗神宗3年、つまり1200年に李圭報が金馬郡、現在の全羅北道益山市にある「支石」を見に行ったという内容である。ここに出てくる「支石」とは、現在我々が「支石墓」と呼んでいる青銅器時代の人々の墓を指しており、これが現在のところ、韓国の支石墓に関する最も古い記録であると考えられている。

〈写真1〉のとおりに、支石墓は地上に巨大な石材を用いて構築された建造物であるため、古くから人々の注目を浴びてきた。支石墓の存在自体は古くから知られていたが、支石墓が「青銅器時代」に築造された「墓」であるということは1960年代以降に明らかになり、これ以外にも多様な形態の墓が営まれており、それらが築造された詳細な時期や性格、そしてそれを造営した人々の社会・文化に対する研究は、1970年代以降活発に行われるようになった、「古くて新しい」研究分野である。

支石墓が築造された「青銅器時代」は、当時の人々が自ら文字記録を残していない、

あるいは他者が記した文字記録が残っていない先史時代であるため、考古資料を用いて当時の社会・文化を復元するという方法を取る事となる。

考古学といわれてさっと思い付くイメージの一つに、死者・墓など、どちらかというとき暗い、なにやらタブーに触れるような印象があるかもしれない。確かに研究の対象物が過去の遺品であり、下を向いて地面を見ながらの調査を行っていることが大部分であるから、前向きな学問ではなさそうでもある。ただ、考古学を学ぶ人間は当時の人々の「死ぬこと (Die)」について研究するのではなく、「死 (Death)」に対する当時の人々の思想やその背景にある文化について、その具体的表現である墓やそこに死者と共に葬られるさまざまな遺物を通して探ろうとするのである。

世界文化遺産としての支石墓

ところで、韓国にはユネスコの世界文化遺産に登録されている場所が2009年8月時点で8カ所ある。そのほとんどが歴史時代のものであるが、唯一、先史時代に属する世界遺産がある。それが江華・高敞・和



〈図〉 朝鮮半島の支石墓分布図（黒点部分に支石墓群分布） 図提供: (財)東北亜支石墓研究所

順の支石墓群である。韓国を旅された方の中にはここを訪ねられた方も多はずである。この3地域がそれぞれ離れた場所にあるにもかかわらず世界文化遺産に登録された理由として、韓国内でも最も密集度が高く、さまざまな型式の支石墓がそれぞれの地域に分布するという点、支石墓築造過程を示す採石場が存在する点、そして今から3000年前に築造されたものであることが確認されたという点が挙げられる。

このような支石墓は朝鮮半島に約4万基ほどが分布しているといわれている。ヨーロッパでは大西洋に沿った約2500キロの範囲の中に約600の遺跡から約6万基余りの巨石遺構が確認されているが、朝鮮半島の場合、世界的に見ても非常に密集度が高いことが特徴である。そして、支石墓は分布密度の違いに地域差はあるものの半島全域に分布する。密集分布する地域として、大同江流域を中心とした平安南道と黄海道、全羅道がある。中でも最も高い密集を見せるのは全羅道で2300カ所に約2万基があるとされて



〈写真1〉 巨大な上石を持つ支石墓 写真提供: (財)東北亜支石墓研究所

いる。

朝鮮半島の青銅器時代墓制

朝鮮半島の地に人間が生活の痕跡を残し始めたのは旧石器時代からであるが、これまでのところ、最も古い埋葬は新石器時代になって見られるようになる。しかしながら、その数は同時期の住居址などに比べると圧倒的に少なく、発見される地域も散発的である。ところが、青銅器時代になるとともに、遺体を納める内部施設とそこに墓があるということを示す外部施設を備えた一定した構造を持つ墳墓が築造されるようになる。

朝鮮半島の青銅器時代には、支石墓、石棺墓、土壇墓、甕棺墓、積石木棺墓といったさまざまな種類の墓が築造された。この中で最も数が多く一般的に築造され、朝鮮半島の青銅器時代を代表する墓制が支石墓である。支石墓は普通、数基から十数基、多い場合60基ほどが列状あるいは塊状に配置され、一つの墓地を形成することとなる〈写真2〉。大規模な墓地の場合、複数の家族集団によって累代的に築造されたものと考えられる。

また、これら墓にはそこに葬られた人、つまり被葬者に対して、その人が日常生活で使用した物品、あるいは埋葬用に作られた各種副葬遺物が埋納される場合がある。新石器時代にも墓に遺物を副葬する風習はあるが、遺物の種類や量などがさほど多様でない。青銅器時代になると、琵琶形銅剣・銅矛などの武器形青銅器、磨製石剣・石鏃などの武器形磨製石器、赤色磨研土器・彩文土器などの土器類、管玉・勾玉などの玉類が副葬遺物として出土する。これらは一つの墓からすべて一緒に出土することはないが、磨製石剣・石鏃、赤色磨研土器がセットを成すという定型性を見せる。また、当時貴重な物品であった青銅器の副葬はそれらを所有できた階層が存在していたことを示しているといえよう。そして、注目しなければならないことは、すべて



〈写真2〉 群集をなす支石墓（上石除去後） 写真提供：(財)東北亜支石墓研究所

の墓で副葬行為が行われるのではないという点である。比較的多くの調査が行われた全羅南道や慶尚北道・南道での事例を参考によると、20%前後の遺構でのみ副葬行為が見られるのである。物品の副葬ができた人とそうでない人がいたことが分かり、階層の分化を想定できよう。

つまり、一つの墓地内における個別の墓の規模、遺物の種類と量などから築造集団内での格差・階層・関係性などを、そして墓地と墓地との比較を通して、築造集団間の階層・関係性を把握することができるのである。

墓から分かること

農耕社会が形成されるとともに人々が定住生活を行うことで、人の誕生から死、つまり、居住地域・生産地域・墓地が一定空間内において営まれることとなる。それら各種活動は血縁を媒介とした農業共同体によって行われたものと考えられる。そのような農業共同体において、死は単純な個人の死ではなく、共同体における損失でもあった。その損失を補填するために墓の築造からそこでの儀礼、その後の定期的な祭祀などの作業を通して、共同体内の紐帯関係を再度確認して強める必要があったのであろう。つまり、死をめぐる人々の行動

とその結果物である墓・副葬品には、当時の人々の生に対する意識・思想・知恵が隠されていると可能性が高いといえよう。それらを基に当時の社会構造・文化的特徴やその変遷などにアプローチしようとするのである。もちろん、それは容易な作業ではない。考古学者が研究対象とし、目にし手に取ることでできる遺跡・遺物は当時に存在した物質文化のごく一部に過ぎず断片的である。その一方で考古資料の現在的問題として、この瞬間にも持続的そして爆発的に墳墓資料が増加しており、それらをどのように処理し分析するか悩みは尽きない。遺跡・遺物に込められた青銅器時代の人々の文化を読み取るための努力は延々と続けられていくのである。

PROFILE

平郡 達哉
ひらごおり たつや



釜山大学校人文大学考古学科博士課程修了。2008年9月から2009年7月まで、釜山大学校博物館で訪韓フェローとして研究。現在、釜山大学校博物館特別研究員。専門は考古学。東北アジアの青銅器時代文化について研究を行っている。

01 | 青少年交流事業

訪日団						
団体名	団 長	計	男	女	期 間	訪問校
韓国教員 (第1団)	李仙姫 開浦中学校 校長	20	11	9	5/12～5/21	川崎市立高津小学校 東京都教育庁 北見市立三輪小学校
韓国教員 (第2団)	金泳顯 能仁中学校 校長	20	5	15	5/12～5/21	都立つばさ総合高等学校 川崎市立養護学校 一宮市立西成中学校
韓国教員 (第3団)	鄭鎮浩 象山高等学校 教頭	19	12	7	6/2～6/11	東京都教育庁 横浜市特別支援教育総合センター 新潟市立東曽野木小学校
韓国教員 (第4団)	孔演錫 大一外国語高等学校 教頭	20	8	12	6/2～6/11	都立美原高等学校 横浜市特別支援教育総合センター 会津若松市立第二中学校



授業交流(韓国教員第2団)



お茶体験(韓国教員第4団)

訪日団						
団体名	団 長	計*1	男*2	女*2	期 間	訪問校
韓国中学生 (第1、2団)	趙成集 冠岳中学校 校長	49	22	23	5/28～6/3	上三川町立上三川中学校(栃木)
	金台植 新明中学校 校長	52	23	25		宇都宮市立古里中学校
韓国中学生 (第3、4団)	張安德 蔚山広域市教育庁 奨学士	54	23	27	6/11～6/17	栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校
	李榮鎬 光州広域市教育庁 奨学士	53	23	26		日光市立東中学校

*1 引率含む *2 生徒のみ



筑波宇宙センター見学(韓国中学生第1、2団)



日光和楽踊りを習う(韓国中学生第3、4団)

02 | 理事会

6月5日に第46回理事会が開催され、2008年度の事業実績および決算が承認されました。役員の異動は次の通りです。

理事

新任 岩 武 俊 廣（社団法人日本自動車工業会 理事・事務局長）

退任 田 中 勲

新任 西 田 厚 聰（社団法人日本電機工業会 会長）

退任 中 山 眞

03 | 維持会員

2009年4月1日～6月30日の期間に、特別会員7名、個人会員71名の方に維持会員制度にご加入いただき、118万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます。（五十音順、敬称略、かっこ内は2口以上の口数）

特別会員 7名

阿 部 孝 哉

内 田 富 夫（2）

檜 崎 正 博

堀 泰 三

前 田 二 生（2）

三 浦 隆

水 谷 幸 正

個人会員 71名

秋 鹿 敏 雄

饗 庭 孝 典

秋 月 望

朝 倉 敏 夫

石 川 武 敏

石 渡 延 男

猪 口 孝

岩 本 卓 也

梅 田 博 之（2）

大 谷 森 繁

岡 田 浩 樹

岡 本 立 雄

荻 野 綱 男

小 倉 紀 蔵

生 越 直 樹

小 此 木 政 夫

越 智 通 雄

加 藤 章

金 丸 守 男

岸 真 清

喜 多 恵 美 子（2）

北 出 明

金 容 媛

木 村 光 一

熊 野 清 貴

黒 江 克 彦

桑 野 栄 治

小 泉 勇 治 郎

小 針 進

齋 木 崇 人

阪 田 恭 代

坂 元 茂 樹

櫻 井 浩

柴 公 也

白 川 豊

須 川 英 徳

杉 森 憲 一

千 玄 室

徐 勝

高 正 晴 子

竹 内 宏

鄭 仁 豪

寺 岡 伸 悟

都 恩 珍

戸 塚 進 也

中 尾 美 知 子

中 野 照 男

中 山 武 憲

新 納 豊

波 田 野 節 子

羽 鳥 敬 彦

浜 田 孝 子

平 田 辰 一 郎

平 山 龍 水

廣 川 淑 子

広 瀬 貞 三

廣 中 平 祐

福 原 裕 二

藤 村 正 哉

藤 原 祥 二

松 田 利 彦

松 本 誠 一

村 井 章 介

茂 木 敏 夫

油 谷 幸 利

尹 勇 吉

余 田 幸 夫

柳 震 太

和 田 と も 美

渡 辺 浩

匿名希望1名

2010年度 招聘・派遣フェローシップ

フェローシップは日韓両国の優れた研究者を招聘・派遣し、研究・調査などの活動を行う機会を提供するとともに、特に次世代を担う中堅・若手世代の研究者の相手国における滞在研究を支援する制度です。

2010年度分の募集期間は2009年10月1日から10月30日までとなっています。

	招聘フェローシップ（訪日）		派遣フェローシップ（訪韓）
	短期コース	長期コース	
期 間	1カ月～3カ月	3カ月を超え11カ月	1カ月～11カ月
年 齢*1	満30歳以上	満30歳以上50歳以下	満30歳以上50歳以下
支給額*2	滞在費月額 A.180,000円 B.210,000円 C.240,000円	滞在費月額 A.180,000円 B.210,000円 C.240,000円	滞在費月額 A.180,000円 B.210,000円 C.240,000円
	研究費月額 120,000円	研究費月額 120,000円	研究費月額 70,000円
	渡航費 実費支給	渡航費 実費支給	渡航費 実費支給
		到着手当 65,000円 帰国手当 64,000円	
書類送付先	ソウル日本大使館公報文化院、釜山総領事館、済州総領事館		日韓文化交流基金
募集期間	2009年10月1日～10月30日（締切日必着）		

*1 2010年4月1日現在の年齢

*2 滞在費月額は基金の基準により、申請者の研究歴などに応じて決定します。滞在費の支給額は当該月の相手国での滞在日数により増減します。

2010年度 人物交流助成

人物交流助成は日韓が共同で実施する青少年・草の根交流、シンポジウム・国際会議、芸術交流の各種事業を支援し、日韓の交流をより活性化・多様化させ、両国の友好・協力関係を深めることを目的としています。

青少年・草の根交流	青少年や大学生による日韓相互理解のためのプログラム、民間交流を目的とする事業
シンポジウム・国際会議	日韓両国の文化や日韓関係など、両国にかかわる人文社会科学分野のテーマを扱うシンポジウム・国際会議
芸術交流	専門家による公演・展示・共同制作など、芸術分野における本格的な交流を目的とする各種の文化事業

2010年度（2010年4月～2011年3月）実施事業に対する人物交流助成の申請を、2010年1月4日から1月29日まで受け付けます（年1回の募集のみとなりますのでご注意ください）。詳しくは募集要項をご覧ください。

フェローシップおよび人物交流助成の募集要項・申請書は当基金ウェブサイト
<http://www.jkcf.or.jp>からダウンロードできますので、どうぞご利用ください。